

「弟」の死 『コスロエス』について

浅谷真弓

はじめに

ロトルーの『コスロエス』がコルネイユの『ニコメード』⁽¹⁾とほぼ同じプロットで構成されていることは良く知られている。前者の結末はやや陰惨であり、その原因を劇作家個人の資質に帰すべきなのか、あるいは執筆時期の空気のようなものに帰すべきなのか、すぐに判断するのが難しいところである。だが、これらの作品を一つの王国の王位継承問題に関して正統的な継承順位を無視し、国政を危うくした罪に対する審判と読み替えてみた場合には、審理のプロセスもその結果も、大変にちがっていると言わなければならない。被告に対する判決は一方は死刑、他方は情状酌量の余地のある執行猶予付きの甘いものである。ふたりの劇作家の法律の実務家としてのキャリアはここでは問題にしないが、「同じ」罪状に対する態度としてはあまりに対照的である。ロトルーの態度は検察側の、そしてコルネイユのそれは弁護人を思わせる。しかし、セネカも言わせているように⁽²⁾、生が耐え難い時には死は優しい処罰である。舞台の上の死刑退場がそのまま現実の判決の意味を獲得できないことも確かだ。今回は、『コスロエス』で言わば「被告」となった主人公の弟の死、すなわち作者による死刑判決に合理性があったのかどうかを検討し、そのことの意味を考えてみたい。

事件の概要⁽³⁾

表題の人物コスロエスはペルシャの王であったが、最近、亡父のと思われる亡霊に悩まされ、心身耗弱の状態にあった。彼には先妻との間に長男、再婚した現在の後妻との間に次男がいるが、国政を危ぶみ、またコスロエスの再婚時に異議を唱えた重臣に唆された長男によって王位が奪取されるのではないかと恐れ、精神状態はより追い詰められたものとなっていた。このことには、次男の母親シラが大きく関与していた。重臣の進言は実際に認められたが、コスロエス本人への圧力はシラの言動および策謀によるところが大半である。シラはコスロエスの恐怖心に付け込み、長男シロエスが継承を速めるべく、また、継承権を分与された次男(異母弟)の継承を完全に不可能とするために、父親と弟の両者を殺害し、王国の全権を掌握する計画であると信じさせるに至る。シラはシロエスをあらかじめ挑発し、剣に手をかけた事実のみをコスロエスに告げて、この計画の信憑性を高めることに成功し、一方で継承に無関心な我が子、マルドザヌを説得して一旦、承諾の返事を得た。マルドザヌはそれが母親の、また王である父親の希望であることを重く見て、自身の身の破滅を覚悟の上で同意した。その後、シラは拘禁中の長男に自殺を強要するが失敗し、自殺の説得に当

たった臣下にも寝返られ、逆にシロエスに捕えられる。宮廷の大勢はシロエス擁立で固まり、シラの策謀が暴露され、その死が正当化されていく。最後にシロエスを殺害しようとした凶器で自殺を迫られ、またマルドザヌに対するシロエスの恫喝、自殺強要及び実際の息子の自殺を目の当りにし、服毒自殺をはかり、死亡した。夫、コスロエスも妻を追って服毒、王位はそのまま長男シロエスに継承された。

以上がこの事件の概要だが、結果的にはシラが創作した通り、現国王コスロエスに対する長男シロエスの謀反が成功し、専制に好都合な条件が揃ったことになる。反面、シロエスの暗殺は未遂であり、シラの共犯と目される次男マルドザヌは殆ど行動を起こしていないことに注目すべきであろう。父コスロエスの被害妄想と同様、シロエスのマルドザヌに対する態度も極めて過敏で、むしろ好戦的である。策謀の主犯であるシラよりも先に弟に自殺を迫り、それを契機として両親を死に至らしめた手口は巧妙で、暗殺の被害者転じて謀反の首謀者となった政治的手腕は見事と言うほかない。勿論、彼にしたところで、このような手段で得た王位にいくばくかの良心の呵責が無い訳ではないだろう。ここで、個人の犠牲の上に成り立つ制度、組織の力に対する無力感を悲劇の名前で呼ぶことは可能である。しかし、責任能力の無い王、悪辣な継母はともかくとして、意志に反して策謀の道具となった弟にまで厳罰を下したことは、どうであろうか。このことは、むしろシロエスに同調することを阻害する材料になるのではないかと思う。長男暗殺に対する作者の処罰は劇の展開の上では厳しいが、その処罰は無実に近いと思われる次男の名誉を救済する性質も帯びているように見えるのだ。以下では事件にかかわった人物たちのそれぞれの行動、言動を分析し、弟の死が兄によっていかに正当化され、またその合理性が破綻するかを述べる。

狂えるコスロエス

コスロエス本人が登場するのはようやく二幕一場になってからである。しかしそれまでも、彼の現状を語る証言がある。シロエスの側近、ファルナスはシロエスに謀反を勧める場面で、次のように簡潔に述べている、

Toujours ou sa furie ou Sira le possède.(1-4)

すでに狂気が一見して分かるほどに進行している。理性的主体としての通常の行動は不可能である。はじめからコスロエスの狂気は一家族の私的な問題ではなく、権力の中核にある公人の問題なのだ。そのことは当然であるが、作者が家族の目を通して見、あるいは口を通して父親の狂気を描写しているのではないことは重要である。彼の狂気は公的な、家族以外の者の目に明らかな客観的価値を持った、立派な証言内容となりうるものだ。ここではシロエスの「私情」や「偏見」を介入させない巧妙な証言の方法が取られている。作者はあえてシロエスの口から父親の狂気を語らせないことによって、その後のシロエスの行動に客観的な、理性的な根拠を与えているわけである。従って、父

親に対する潜在的な怨念はファルナスという他人に媒介された証言、舞台上の真実となって隠蔽され、直截に語られる機会は殆どない。しかし後に述べるように、シロエスが「王の狂気」を「父親殺し」に利用していることは継母や義弟に対する言動から推察できると思う。こうして公人と私人の境界が意図的に曖昧にされたまま劇は展開して行くのだが、ファルナスの証言を正当化するため、観客すなわち陪審員の眼前に、コスロエス自身が呼び出される。

(à part, dans un accès de démence.)

Noires divinités, filles impitoyables,
Des vengences du ciel ministres effroyables,
Cruelles, redoublez ou cessez votre effort,
Pour me laisser la vie ou me donner la mort.
Ce corps n'a plus d'endroit exempt de vos blessures,
Vos couleuvres n'ont plus où marquer leurs morsures,
Et de tant de chemins que vous m'avez ouverts
Je n'en trouve pas un qui me mène aux enfers.
Ce n'est qu'en m'épargnant que la mort m'est cruelle;
Je ne puis arriver où mon père m'appelle.
Achevez de me perdre, et dedans son tombeau
Enfermez avec lui son fils et son bourreau.(2- 1)

公人、私人の境界が曖昧のように、生死の区別がはっきりしない精神状態にあって、コスロエスは決着を求め、処罰を望み、自殺願望をにおわせる。最後の節にある自白と共に、この狂気は彼の死を正当化するに十分である。何よりも本人が死を望んでいることが最大のポイントであると言えよう。この発言にはシロエスの影はみじんも感じられない。もうひと押しすれば、すぐに生きることを放棄してしまうであろう。次にシラから注ぎ込まれるシロエスの謀反の噂など、ちょっとしたきっかけ、いわば口実には過ぎないのである。

過去の親殺しが原因となった狂気の発作には、原型として、エウリピデスの『オレステス』の例が挙げられる。シロエスの発作はオレステスの発作と同じタイプである。⁴⁾

[オレステスたちあがり、あとずさりして狂気の発作を見せる]

エレクトラ あれ、オレステス、あなたの目がすわってきましたよ。いままで正気かと思っていたのに、もう狂気にとりつかれてしまって。

オレステス 母上、お願いですから、わたしに、この血まみれの蛇のような娘たちを、けしかけ

ないでください。ああ、娘たちが、ちかよってきてわたしにとびかかる。

エレクトラ かわいそうなオレステス、こわがらないで、床のなかにいなさい。はっきり見えるとあなたはいうが、それも気のせいで、なにもいないのですよ。

オレステス ああ、アポロンさま、陰鬱な犬の目をした恐ろしい女神たち、あの地下の死者たちの司祭たちが、わたしを殺します。

[オレステスはエレクトラの腕をふりほどこうとする]

エレクトラ はなしはしません。あなたを、あわれにとびはねまわるままにはしておけませんもの、この手で身体をしっかりとだいていますよ。

オレステス はなしてくれ。あなたも、わたしにつきまとうエリニュエスの一人だ。わたしの腰をとらえ、地獄へつきおとそうとするのだろう。

[オレステスはエレクトラの腕をふりほどき、エレクトラからとびはなれる]

エレクトラ ああ、あわれなわたし、だれにも助けてはもらえない。わたしたちは、神さまの恨みをうけているのですもの。

殺害の動機はそれなりの道理があると認められるにもかかわらず、作者はオレステスの狂気が一方で当然の結果であると見做し、また観客にもそのことを説得する事ができる。復讐の正当性と親殺しに対する良心の呵責とは均衡しており、両者の間で精神は引き裂かれ、分裂する。オレステスの例は非常に大きな影響力を持つと予想されるから、こうした狂気のパターンが一種の舞台上の約束事の如き扱いを受けているとすれば、コスロエスの狂気は前例をあまりに忠実になぞった、観客に殺害を承認させる「口実」のように思われる。つまり、最初の段階では狂気が始めにあって、シロエスの謀反、強要が自殺のきっかけ、口実になるように見える。しかし、オレステスの狂気のパターンを引き写し、引用したことで文字どおり古典的な証拠固めに説得性を求めたため、その根拠に父親殺害を誘導するむしろ強引ともいえる明白さを与えてしまったのである。コスロエスの狂気は、作られた証拠の不自然なまでの完璧さに彩られている。

未遂に終わったもうひとつの事件の被害者であるニコメードの父親プリュジ阿斯は、やはり息子に殺されるかもしれないという妄想を抱いてはいた。が、こちらは純粋に宮廷内外における権力闘争の疲労に原因があり、自ら前例を参照するように指示しながらも、亡霊、怨恨、狂気などの私的、個人的な事情とは無関係である。新旧の権力者が主導権争いをし、たまたまその二人が親子関係にあったために複雑な展開をみただけである。死者のない大団円はパワーポリティクスの結末を語る整合性に満ちていて、家庭においては毫碌した親父の隠居という哀れな、王の職業に相応しからぬ不名誉のうちに幕を閉じる。しかし、証拠があだとなってかえって殺意が浮き上がってしまうのと

は対照的に、生きながら墓場に閉じ込められた恰好のプリュジラスの方が、コスロエスよりよほど巧妙に「殺された」と言えなくもない。権力者の死とは、権力の喪失以外の何物でもないだろう。

そこで、狂気について第二の重要な根拠が提示されることになる。権力者が自らの権力を譲り渡し、政治生命を終わらせるにあたっては、相当の手続きを必要とするわけだが、コスロエスはその手続きを誤った。少なくとも、家父長制の伝統から正嫡の長男をもって後継者とする建前の王権の継承順位を、私的な裁量で変更した。このことは、舞台となったペルシャの宮廷が元来専制的であるという前提をもってしても、国政に対する重大な裏切りであろう。実際、軍隊による武力を背景にした権力闘争は、宮廷での重臣たちの駆引きに集約されている。コスロエスの乱心でにわかに関臣たちの動静がクローズアップされ、結局、彼らがシロエス擁立に動くことで事態が収拾されることを見れば、宮廷の総意なるものの正体は、王の意志とは無関係に存在する別の権力機構であることがわかる。つまり専制的ではあっても、専制そのものが許容されているのではない。コスロエスの行為は既存の制度に違背するばかりでなく、現状での宮廷の政治体制を理解しないという二重の誤りに陥っている。サトラップを代表してパルミラスがシロエスに言う通り、コスロエスの個人的な権力、矛盾した言い方だが、個人としての王の権力は極めて限定的に取り扱われていると思われる。

La Perse à ce grand coeur reconnoîtra son maître.(1-4)

コスロエスがシロエスを廃嫡して、マルドザヌを後継者とした最大の原因がシラによる策謀にあることは間違いない。狂気、制度と宮廷に対する背信行為に加えて、それらと連動する形での、尋常な判断力の欠如がシラへの盲信となって表れる。正気に戻っている状態で、なおかつ判断力がないのは救い難い。シラの讒言を鵜呑みにすると、その場でマルドザヌの即位を確約する。

SIRA

(.....)

Et je puis craindre pis, après que ce matin

Il eût, sans Mardesane, été mon assassin,

Et que pour cet effet il a tiré l'épée.

COSROÈS

O dieux! que dites-vous?

*SIRA(.....)

Je pourvoirai, madame, à votre sûreté.(2-1.)

相談役の進言は退けられて、迷妄が際立っていく。

Je prendrai vos conseils quand j'en aurai besoin.
Cependant, pour ne rien tenter à notre honte
Arrêtez Siroès, et m'en rendez bon compte.(2-1)

しかしコスロエスは直接シロエスに直面して申し開きを聞く機会を作らない。さして重要でない用件を言い訳に退場すると、五幕五場まで舞台には現れず、再登場したその時が最後であるが、三幕以降の不在で統治能力のなさを証明し、王が当然求められる威厳までも失い、シロエスの寛容に許されて、妻子の命乞いだけを役目としている。

Révoque donc leur mort et fais qu'on me les donne.(5-5)

コスロエスが死ぬべき理由は以上のように様々で、改めて列挙するまでもなく、必要十分な正当化が行われている。しかしその正当化がかなり総花的で、むしろあざとく過剰になされているようだ。シロエスの謀反を庇うあまり、コスロエスは極度に矮小化して描かれる。だが、そこには厳しい相克の上に競うにふさわしい王位の価値が見い出せない。もとよりコスロエスはシロエスの敵ではなかったのだ。判断力を欠き、また実権のなかったこの人物は、免罪されるべきであった。では真の敵は、継母のシラであったろうか。

シラの弁明

登場から死に至るまでのシラの行動は、弁護の余地なく悪辣に描かれているのだが、断罪はやや早急であったと思われる。その第一の根拠は、前節で見てきた夫であり、王であるコスロエスの精神状態である。夫としては勿論のこと、王としての責任能力はない。このことはシラが身近にいて熟知するところだ。おそらくは彼の狂気を最初に知ったであろうシラの、国政に対する野心は政治的混乱に対する不安、シロエスを担ぐ宮廷の反対勢力に対する恐怖と同義である。また彼女には共に国政に参画してきた者の自負があり、シロエスと対等に渡り合うだけの覚悟もある。シロエスとの最初の対決は開幕から華々しく、コスロエスのふがいなさに好対照を示す。

Quand il m'a partagé l'éclat qui l'environne,
J'ai dans son alliance apporté ma couronne;
J'en achetai chez lui le degré que j'y tiens,
Et j'ai, comme mes jours, joint mes états aux siens;
Je lui dus sembler belle avec un diadème;
Abdnemède avec lui n'apporta qu'elle-même;

Et le trésor encor n'étoit pas de grand prix.(1 - 1)

シロエスが長子としてペルシャの覇権の一翼を担ってきたのと同様、シラも又、自らの政治的手腕によって帝国の拡張、維持に努めてきた。それをシロエスも決して否定はしない。シロエスの母親、コスロエスの前妻への侮蔑的態度はそのまま彼女の自信を裏書きするものだが、それだけではなく、今後予想されるシロエスの権力の独占に対する異議申し立てでもある。このままコスロエスが発狂してしまえば、制度上は勿論のこと、彼女の権力の拡張を嫌う宮廷の勢力に押し切られる形で、シロエスに全権が移行することは明白である。彼女はこの宮廷ではいつまでもよそ者であり、後妻にすぎない。しかも、統合された領土や権益が実子のマルドザヌに相続される可能性は無きに等しいのである。領土の再分配は内乱を呼ぶことになるだろう。現状を誰よりも把握しているシラにしてみれば、王の完全な発狂や死を待たず、クーデタはいつやって来てもおかしくない状態にある、と考えるのが自然だろう。むしろまだ王の進退が流動的な今こそがその絶好の機会であるにちがいない。事態が決定的になり、公的な儀式や決議が行われるとすれば、シロエスにとっては一部譲歩せざるを得ない結果さえ予想される。シラはシロエスがそうした譲歩を行うとは思えないし、彼女自身も名ばかりの譲歩には満足しない。この場の選択肢は二つにひとつ、「全か、無か、」である。政治的空白、混乱、内乱を避け、一方自分自身の権力を保持する必要があるとなれば、(なぜなら、自分の固有の領土を要求するのは正当であるから)答えは決まっている。彼女の領土を侵す「野心的な危険人物」シロエスを斥け、マルドザヌに即位させるよりない。そこで、狂気の発作から一時我に帰ったコスロエスに進言することになる。シラはオレステスに対するエレクトラのように話す。良かれ悪しかれ、彼女のほかにコスロエスを補佐する人間などいなかったとすら思わせる。

Chassez de votre esprit les soins mélancoliques
Qui montrent à vos yeux ces objets chimériques.
C'est une illusion dont ils sont effrayés,
Et vous ne voyez rien de ce que vous voyez.(2 - 1)

Nourrissez-vous toujours ce remord qui vous reste?
Si vous ne l'étouffez, il vous sera funeste.
De ce malheur, seigneur, perdez le souvenir;
L'avoir gardé vingt ans est trop vous en punir.(2 - 1)

そして王位の禅譲を促すのだが、後半は少々欺瞞めいている。

Vos ennuis de ce soin vous rendent moins capable.
Déposez ce fardeau devant qu'il vous accable:

C'est un faix qu'il me faut déposer avec vous;
Mais je renonce à tout pour sauver un époux.
Déchargez votre esprit de ce qui le traverse;
Cosroès m'est plus cher qu'un monarque de Perse;(2-1)

だがこれもコスロエスを説得する方便なのか、それとも真の愛情から出る言葉なのか断定できない。あるいはその両方、シロエスの虐待を予感し、恐れた結果の哀願かもしれない。彼女が真似て見せたエレクトラは最後に言っていた、「ああ、あわれなわたし、だれにも助けてはもらえない。わたしたちは、神さまの恨みを受けているのですもの。」と。彼女は状況設定こそ違え、エレクトラと同じ孤立無援の中で、このような態度決定をせざるを得なかった、選択させられた、と言うべきであろう。その証拠に、彼女は「腹心」と恃むサルグリーグに裏切られ、自殺する。自殺による退場が不当と思われる第二の根拠はこれである。誰も彼女を助けなかった。なるほど、シラがコスロエスに退位を、シロエスに死を迫ったいきさつには万死に値する合理性がある。しかしそうしなければ、彼女が殺されたであろうから、そうしたのだ。彼女自身に選択の余地が与えられず、選んだ方法には最初から成功の見込みがなかった。シラの絶叫が響き渡る。

Reine est ma qualité, quand tu sais qu'elle est vaine!
Hier j'étois ta marâtre, et je tiens à grand bien
De mourir aujourd'hui pour ne t'être plus rien.(5-2)

シラはペルシャ帝国を支配したかったのでも、シロエスが憎かったのでもない。政治的安定と自分の領土の正当な統治、何より生命の安全が保証されることを願ったのだ。マルドザヌの存在がそれを許さなかったのか。次に母の傀儡となった彼の行動を検討してみよう。

存在自体が悪であること

タキトゥスの《年代記》に通底する、謀反に対する考え方の根本に、兆候がまったく見られなくても、それが可能な権力を持った者は、それだけで処刑の理由になるというのがあるように思う。ニコメードもちょうど、彼の父にとってそのような存在となりおおせた一人であろう。彼の背後にはローマとの深い確執があったから、権力闘争の構図は意外にはっきりと描くことが可能である。義弟のアタールはローマ側の人間として、政敵あるいは恋仇として登場し、すべての「誤解」の氷解とともにその兄にふさわしい「弟」という地位を与えられ、静かに退場する。アタールも母アルシノエの策略でニコメードを脅かす影となりかけたのだが、ローマから帰ったばかりで宮廷にも軍隊にも実質的な権力を一切持たなかった彼にその資格はなく、タキトゥス的な公式を展開するには不十分であった。ローマという後盾は魅力的でも強力でもあったはずだが。一方、シロエスの義弟マ

ルドザヌは母の領地を背負って生まれてきた。当人にはそうした自覚が無かったろうが、母親は彼を相続人として育てた。マルドザヌはシロエスにとって第一にこの点で脅威である。また、コスロエスは父を殺して王位を篡奪した。結果としてシロエスもその轍を踏むことになる。コスロエスとシロエスとは同じ脅威の連鎖に巻き込まれ、同じ思考形態を持っている。コスロエスの妄想はそっくりシロエスの妄想に受け継がれる。シロエスにとっての年少の権力者は、マルドザヌのみである。たとえマルドザヌに母に固有の領地が無くとも、シロエスにはその存在自体が脅威なのだ。この第二の点も、マルドザヌが自力で解消できない負荷である。彼は以上のように母からも父からも等しく負の財産を授けられ、シロエスの前に押し出された。それでは兄に恭順の情を示して、最悪の事態を回避する方法はなかったのであろうか。

その機会は何度かあった。舞台上でふたりが初めて対面するのは1幕2場で、設定は当初より極めて危機的である。シロエスがシラの挑発を受けて剣に手を掛けた直後に、マルドザヌが登場する。しかし彼は口論の原因を聞き、すぐに野心のないことを告げている。それに対しシロエスは出口をふさぎ、逃げ場を奪う。

MARDESANE

Vous gardez vos soupçons, et moi mes sentiments;
Et j'estime trop peu l'éclat d'une couronne
Pour me gêner l'esprit du soin qu'elle vous donne.
Ce n'est qu'un joug pompeux; le repos m'est plus doux.

SIROÈS

Vous n'avez rien à faire, on travaille pour vous;
Et vous pouvez juger si l'empire a des charmes,
Par ceux que vous trouvez à commander nos armes.
Ce bâton, que le roi vous a mis à la main,
Déjà sur les soldats vous a fait souverain.(1-2)

この後シロエスの執拗な追及が続くが、彼は冷静に切り返している。

C'est votre sentiment, et ce n'est pas le mien;
Non que je ne me sente, et d'âme et de naissance,
Capable d'exercer cette illustre puissance;
Mais, quelque doux éclat qu'ait un bandeau royal,
Il ne me plairoit pas sur un front déloyal.(1-2)

だが、前述のようにシロエスは彼の存在自体が脅威なのだから、いくら否定したところで論理の道筋に変更はない。シロエスは紛れもなくコスロエスの息子だ。マルドザヌはシロエスの閉塞した論理構造を実感して、上の言葉を述べている。この時点で結果は見えているのだ。勿論彼にとって権力への誘惑がまったく無効だったわけではない。2幕2場でコスロエスから王位の委譲を言い渡されると、傍白で動揺した心情を示す。

Funeste ambition, cache-moi tes amorces!(2-2)

彼はそのことの意味、行き着く先を良く知っていた。

C'est un de vos présents, je ne puis le haïr;
Vous voulez que je règne, il vous faut obéir.
Mais je monte à regret, assuré de ma chute;
Et plaise au ciel qu'au sort mes jours seuls en butte!

(A Sira.)

Ah, madame! quel fruit me produit votre amour!(2-2)

(à part.)

Périlleuse vertu,

Fatale obéissance, à quoi me résous-tu!(2-3)

次に登場するのは5幕3場で、既にシロエスが実権を握っている。ここでは2幕でのやり取りが別の言葉で繰り返されるに過ぎず、マルドザヌが自殺を選ぶように誘導するのだけが目新しい。

MARDESANE

En effet, cette épreuve en vous même est visible,
Quand pour l'avoir touché vous brûlez de courroux.

SIROÈS

Mais par quel droit encor vous en empariez-vous?

MARDESANE

Par droit d'obéissance, et par l'ordre d'un père.

SIROÈS

Contre un droit naturel quel père m'est contraire?

MARDESANE

Quel? le vôtre et le mien qui, juge de son sang,

A selon son désir disposé de son rang.(5-3)

SIROÈS

Vous avez trop de coeur.

MARDESANE

Assez pour faire voir

Une grande vertu dans un grand désespoir.

SIROÈS

Mais il se produit tard.(5-3)

与えられたチャンスは見せ掛けのもので、アタールがニコメードの命を救い、許されるような幸運はついに巡って来なかった。マルドザヌの主要な役割と言えば、座して死を待つだけだ。最後の言葉はむしろ暴君への犠牲者の怒りである。

Allons, règne, tyran, règne enfin sans obstacle;

J'ai reçu de mon père, avecque son pouvoir,

Celui d'aller trouver la mort sans désespoir.

(Il sort avec Sardarigue.)

彼は長兄にとって悪辣な母親の傀儡、無力で優柔不断な、それでいて野心的な義弟であった。存在自体が悪であるような弟という立場で、彼は確かに自分の死に対して無力だ。回避の方法はなかったか、という冒頭の疑問に対する答えは、だから、なかった、と言わなければならない。その無力さを前にしたシロエスの残虐さは異様に映る。全権を掌握した時に勝敗は決していたはずなのに、そこでシロエスが満足できなかった理由は何であろうか。純粋な権力闘争とは異なった家庭劇としての『コスロエス』の側面がにわかに浮かび上がって来る。

弟殺し

コエロエスの狂気は一家の父の狂気ではなく、公人の狂気として現れる。シラの野心も、政治生命を賭けての権力闘争という形を取る。マルドザヌの即位の受諾は予想される国政の混乱に対する、可能な打開策のひとつであった。だがこれらのいずれもが疑わしい、割り切れない部分を残しているように思われた。どの場合にも、彼ら三人の側から破滅を避ける方策が奪われており、一方の当事者であったシロエスに常に主導権が与えられていたからである。暗殺を受けての正当防衛という外見とは裏腹に、実際はシロエスだけが危機的な事態を回避することができた。そのことは、以上で見てきた通りである。では何故、シロエスは自分の力を自覚する事なく、三人を死に至らしめた

のであろうか。

彼の行動を左右したのは、母を裏切って別の女に自分以外の息子を生ませた父への憎悪であった。シロエスにとって、コスロエスは王である以前に父である。

SIROÈS, furieux.

Hé bien, cruels, êtes-vous satisfaits?

Mon règne produit-il d'assez tristes effets?

La couronne, inhumains, à ce prix m'est trop chère.

Allons, madame, allons, suivre ou sauver un père.(5-8)

ここで残虐な、非人間的なと形容されているのは彼を擁立した重臣たちを指すわけだが、この非難は的外れであり、空疎である。義弟マルドザヌが退場に際して彼に浴びせた非難を重臣らに振り向け、親殺しの責任転嫁を行い、被害者顔の下に政治的な野心の達成を隠蔽する。このせりふによって、彼は不幸な息子であることを前面に押し出し、王となったこと、また重臣の隠し子との恋を成就させたことを忘れさせようとする。そう取るのは、いささか穿った見方であろうか。しかしこれまで、この事件は権力闘争、政治的なゲームであったはずだ。彼に与えられ、また敗れた三人にその死の正当性を保証して来た大義は、すべて個人の意志、感情とは無縁でなければならなかった。彼自身、そのことを知っているからこそ、重臣たちの動きをこう非難したのであろう。国家の存亡こそが、この「家族」の崩壊と長子相続に説得力を付与する唯一の根拠であった。ところがシロエスの最後の「ひとりの父を救う」という言葉がはからずも彼の行動の矛盾を暴き出してしまうことになる。

思い返してみれば、「父」を救うチャンスは何度もあった。父を救うために、その妻と息子を救うことは可能であった。だからむしろ、彼は政治的な野心を満足させるために王を見殺しにしたのではない。権力闘争の舞台を利用して、父への復讐を果したにすぎないのだ。その意味で、彼は不幸な息子であることを自認してもよい。例えば、義母に自殺を強要されたとき、弁明し、身の証を立て、母子の安全を保証して彼女の恐怖心を取り除く責任は、王位継承権で上位を占める彼の方であった。父の狂気を知ったとき、父を補佐すべきだったのは義母ではなく、彼である。重臣が謀反を勧めたとき、これを諫めて、宮廷内の状況を見据えることができた。義弟が王位の継承には気が進まないと言ったとき、親身に話し合う時間は十分にあった。彼はざっと見ただけでも、これだけのチャンスを捨ててきた。三人の解決策がことごとく成功の見込みのないものだったのと対照的に、彼にはやろうと思えばいつでも事態を收拾に向かわせる手だてがあった。だが敢えてそうしなかった。三人と直接対決した時に、生母に対するシラの侮辱への怒り、シラに熱を上げるコスロエスへの不信感、ふたりの愛情を受けるマルドザヌへの嫉妬など、どの場面でもシロエスを最後に導いたのは濃厚な怨恨の感情だったのではないか。彼は重臣らの策謀に乗った傀儡、無力な王位継承

者を演じるが、マルドザヌを断罪した同じその罪で自らを罰することは決してない。できないのだ。マルドザヌがシラの言うままになって、積極的に拒否の姿勢を示さなかったことで咎めだてされるのであれば、彼はそれ以上の行為によってより重い罰を受けねばなるまい。シロエスはすすんで謀反に加わった。重臣らと彼とは同等の共犯者である。いまさら「父殺し」の汚名を着せられる重臣らの方こそ、迷惑というものだ。国家の大義はここに至って地に落ちる。ペルシャ帝国の存亡という背景をもって壮大なスケールで展開されたはずの政治劇は、最高権力者としては余りに稚拙な主人公の行動原理が明らかにされるに及んで、コップの中の嵐に墮した。意志に反して、独占したかった父を殺してしまった。このように無力な彼は確かに不幸であろうが、自分で選び取った不幸である。その選択は愚かなものであって、英雄にふさわしい賢明さのかけらもない。結果として彼が行ったことは、権力闘争ではなく、弟殺しである。義母はそのついでだった。同情は買っても、称賛は受けない。大義を利用して私憤を晴らすのは愚かだ。この事件の割り切れない、後味の悪い、陰惨な結末の原因はシロエスのこのような意識的な愚かさにあるといえる。そして、真に処罰されるべき人物は彼であることが示されてしまう。逆説的な急転である。常に裏切り者であるサルダリーグが最後に断罪して、傍白で言う、

Ses soins sont superflus;

Le poison est trop prompt, le tyran ne vit plus.(5-8)

シロエスの為に用意されていた、弟殺しの正当性を主張できる証拠は、すべてが彼自身の有罪性を証明する。三人の自殺退場、作者による死刑判決は不当であった。シロエスの行動の合理性は破綻した。彼は弟を殺す。弟の死は、勧善懲悪の結果得られる称賛ではなく、愚かさと悪意の果てに乞う同情の材料であった。

おわりに

ドービニャックは、『演劇作法』第2部第1章で、君主の死が正当化されるには、きわめて慎重な配慮が必要だと言っている。「王が悪人であることを信じたくないし、臣下がたしかに虐待されたにせよ王の神聖な身体に触り、絵姿といえどもその權威を犯すことを認めない」との立場である⁶⁾。その意味では、コスロエスの死は十分に段階を踏んで扱われた。合理性を追及するあまり、必要の限度を越えて過剰になった面があり、どことなく繁雑で、切れ味に欠けるうらみがある。他方、義弟の死に関しては、一見した所の合理性に反して、終始シロエスに事態の決定権が与えられているため、運命ではなく彼自身の理不尽さが際立ってしまう。このことは原作との関係によるのかもしれないが、作者があえてこうした人物を選んでいる点には注目しなければならないだろう。初期の『忘却の指輪』以来、作者は様々な種類の「愚かな王」を好んで舞台に登場させている。またそれらと対照的に才気煥発な悪女が作品を最後まで展開し、支えて行く重要な役割を担ってきた。この作

品の人物設定も同様の流れの中で捉えられ、単純な同調を許さない、あるいは妨げるとしても良い結果を生み出している。ここでは弟の死が、権力と正義、理性などといったものを結ぶ関係の恣意性の象徴となっていて、むしろその恣意性の上に悲劇が成立しているようにさえ思われ、それはシロエスなり、コスロエスなりを中心人物とした場合には過剰なものだろう。

注

- (1) 伊藤洋・皆吉郷平訳 コルネイユ名作集所収 白水社 1975年
- (2) 《テュエステス》第2幕 381頁 アトレウス 村松正俊訳 世界戯曲全集第2巻ギリシア・ローマ古典劇集所収 世界戯曲全集刊行会 昭和5年
- (3) Jean Rotrou, *Cosroès, Tragédie, 1649*, in *OEuvres de J.R.* Ed par Violet-le-duc, Genève, Slatkine, 1967, vol V pp.325-407. 以下の引用はすべてこのテキストによる。
- (4) 松本仁助訳 ちくま文庫ギリシア悲劇IV エウリピデス(下) 362/363頁 1986年
- (5) 第2部第1章 主題について(引用した訳文は、未刊の戸張智雄訳による。)